



Title	〈ヤンチャな子ら〉の大人への移行
Author(s)	知念, 渉
Citation	大阪大学, 2016, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/56041
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 （ 知 念 渉 ）	
論文題名	〈ヤンチャな子ら〉の大人への移行
<p>論文内容の要旨</p> <p>1990年代後半以降、「ニート」や「フリーター」に象徴される若年者の雇用の問題、格差社会、「子ども・若者の貧困」などのテーマのもとで、ノンエリートの学校から仕事への移行、あるいは大人への移行の過程を描く研究が数多く蓄積されてきた。しかし、これまでの研究は、エリート／ノンエリートという区別に目を向ける一方で、ノンエリート内部にある階層性や、それを編成する原理に光を当ててこなかった。本論文の目的は、第一に、ノンエリート内部における大人への移行過程の階層性、そして、その階層性を編成する原理を明らかにすることである。そして第二に、その作業を通じて、大人への移行過程の階層性を描くための新しい視座を提供することである。具体的には、〈ヤンチャな子ら〉という男性たちを高校1年生から20歳を過ぎるまで追跡して得られた質的データをもとに、上記の目的を達成する。</p> <p>まず第1章では、〈ヤンチャな子ら〉を「ヤンキー」として捉え、そうした若者たちが先行研究でどのように描かれてきたのかを確認した。その際、「ヤンキー」、「生徒文化」、「大人への移行」、「子ども・若者の貧困」などのテーマに関わる先行研究を、それらが提示するヤンキー像別に整理した。そのヤンキー像とは、「若者文化としてのヤンキー」、「生徒文化としてのヤンキー」、「階層文化としてのヤンキー」の三つである。そして、それらが共通して抱えている問題点として、二点指摘した。第一に、ヤンキー集団を一つのまとまりとして理解し、その内部の多様性や階層性を十分に描けていないという点である。第二に、若者文化・生徒文化・階層文化のいずれの視点で描かれる場合であっても、それらのどれか一つに還元させて解釈してしまっているのかという点である。それに対して本論文では、P. ブルデュエの社会理論、またそれに基づいたエスノグラフィーを手がかりにして、〈ヤンチャな子ら〉の生活実践を、階層文化、生徒文化、若者文化という三つの力学が重なり合うなかで展開しているものとして捉えることを示した。</p> <p>第2章では、〈ヤンチャな子ら〉に対する調査の概要を述べた。調査の方法と対象（R高校の特徴や〈ヤンチャな子ら〉のプロフィール）について説明した。</p> <p>第3章から第6章までは、データに基づきながら、〈ヤンチャな子ら〉の大人への移行過程を記述した。</p> <p>第3章では、〈ヤンチャな子ら〉と学校、そして教師たちとの関係を考察した。〈ヤンチャな子ら〉のもつ家庭の文化は、これまで数多くの教育社会学研究が明らかにしてきたように、確かにフォーマルな学校文化と葛藤するものであった。しかし同時に、彼らと教師たちが具体的に対峙している日常場面に焦点を当てると、そうした葛藤がかなり緩和されていた。すなわち、〈ヤンチャな子ら〉は学校生活のなかで、「時間と空間のコントロール」をし、教師と自らの「非対称な関係性の組み替え」を試み、「学校の意味世界の変換」を行いながら学校生活を送っていたのだが、他方で教師たちは、そうした〈ヤンチャな子ら〉の行動をうまく活用しながら教育活動を成立させていた。そしてその結果として、〈ヤンチャな子ら〉が教師に抱く感情は、決して否定的なものではなく、むしろ肯定的なものだったのである。これらの考察の結果、〈ヤンチャな子ら〉がもつ家庭の文化とフォーマルな学校文化は葛藤しているものの、R高校の学校文化、言い換えればR高校の「組織的ハビトゥス」によって、その葛藤がかなりの程度抑制されていることが明らかになった。</p> <p>第4章では、〈ヤンチャな子ら〉という集団の成員性や境界がどのように決定されているのかを分析した。集団内部の成員性や内部での地位は、〈ヤンチャ〉であることや、そうした経歴を持っていること、すなわち、〈ヤンチャ〉文化資本と呼びうるものによって決まってくる。また、集団内で下位に置かれている者が、集団の外部の生徒たちを〈インキヤラ〉という言葉によって攻撃・嘲笑することによって、集団の境界が明示的に構築され、維持されていることも示された。さらに、これらの分析の結果、集団内部での地位は、その個人がそれまで歩んできた軌道に左右されるものであり、そのために、そこでの地位は、より広い社会で置かれた位置と相同することが明らかとなった。具</p>	

体的に言えば、〈ヤンチャな子ら〉のなかでもより厳しい家庭背景を有するダイ、コウジ、ヒロキは集団内部で低い地位に置かれていたのである。

このようにして〈ヤンチャな子ら〉内部の階層性に目を向けてみると、そのなかで周辺化された者たちは、他の者の比べると極めて厳しい家庭背景を有する者であった。そこで第5章では、その3名の家族に対する語りを分析した。その3名にとって家族とは、常に肯定的に評価できるものではなく、彼らの自らの家族についての語りは文脈や状況に応じて流動するものであった。これは、他の〈ヤンチャな子ら〉が家族のことを肯定的に語るのとは極めて対照的である。3名に焦点を当てたことで逆に浮かび上がってきたことは、フォーマルな学校文化と葛藤する傾向にあるとはいえ、家庭の文化を土台に一貫したアイデンティティを構築できていること自体が、一つの資源となっているということである。言い換えれば、第5章で光を当てた3名は、そうした資源すら欠いている状態だったとも言えるだろう。第4章、第5章の分析を通じて見えてきたことは、外部から見れば一つの集団のように見える〈ヤンチャな子ら〉の内部に、二つの分断された経路を歩む者たちが内包されているということであった。

このような〈ヤンチャな子ら〉の内部にある分断された状況は、学校から離れて大人へと移行していく際に、より明確になっていく。それについて論じたのが第6章である。〈ヤンチャな子ら〉の離転職経験をみると、多くの場合、就職の手がかりとして社会関係を活用していることが明らかとなった。しかし、社会関係を通じた就職とはいえ、内実を見てみると、どのような関係を通じてどのような仕事に就くのかという点では、二つの異なる経路が存在していた。すなわち、「なんで仲良くなったか知らん」先輩や「ちょっと飲んでた」居酒屋の店員といった即興的なつながりを通じて仕事を転々とする者と、「親戚」、「地元のツレのオカン」、「幼なじみ」といった比較的近い社会関係を介して、相対的に安定した仕事に就いている者たちの間にある違いである。そして、その二つの経路のどちらへ進んでいくかは、第3章から第5章までの分析もふまえて考えると、彼らの学校経験、さらには家庭背景にまでさかのぼる必要があった。つまり、〈ヤンチャな子ら〉のなかでより厳しい家庭環境を有する者が、学校生活を過ごす際に集団内部で周辺化され、さらに学校から離れた後も、不安定な職業生活を送っているということが明らかとなったのである。

以上のように本論文で見出された知見は、次のようにまとめることができる。〈ヤンチャな子ら〉という集団の内部には、明らかに分断された状況を生きる者たちが内包されている。一方に、親の世代から同一地域に住み続けている家庭出身の者で、小さい頃からの友人や「幼なじみ」の者が多い。彼らの担う家庭の文化はフォーマルな学校文化と葛藤するものの、彼らは学校を中退／卒業し、「地元のツレのオカン」や「幼なじみ」の紹介によって、比較的安定した仕事に就いていく。他方、居住地域を転々として暮らしてきたなどの事情から、地域とのつながりをほとんど持たない家庭で育った者たちがいる。彼らは、貧困であることや引っ越してきたことを背景にして、小・中学校時代はいじめにあうものの、いじめていた者に報復する、あるいはさらに地位の高い者との関係を作ることによって、いじめから脱却し、R高校では〈ヤンチャな子ら〉の一員となっていた。彼らの家庭は、彼らにアイデンティティの土台を提供するほどに安定したものではないし、彼らに仕事を提供する資源ともなりえない。そのため、彼らは、即興的なつながりを通じて、より不安定な仕事に就いていくのである。

以上の分析結果をふまえ、終章では、本論文の目的に照らして考察を行った。ノンエリート内部の階層性とその編成原理を明らかにするという第一の目的に対しては、ノンエリート内部にも階層性があり、それを編成している原理は社会関係資本であると結論づけた。そして、〈ヤンチャな子ら〉に対する調査から明らかになったその結論が、どれほど一般性を有するものなのか、そして、それはどのような意義を持つものなのかということについて考察した。第二の目的は、大人への移行過程の階層性を描くための新しい視座を提供することであった。先行研究ではこれまで、大人への移行過程を若者文化や生徒文化、あるいは階層文化といった一元的な要素に還元して理解しようとする傾向にあった。本論文では、そうした先行研究の「一元的アプローチ」に対して、「複合的アプローチ」の重要性を主張した。「複合的アプローチ」とは、複数の要素（たとえば若者文化・生徒文化・階層文化）の力学が重なり合い、互いに屈折したり強化したりすることなかで展開しているものとして、人々の生活実践を捉えようとするアプローチである。そのアプローチの意義を、これまでの調査で用いられてきたアプローチと比較して、考察した。そして、最後に今後の課題と展望について述べた。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (知 念 渉)			
	(職)	氏 名	
論文審査担当者	主 査	教授	志水 宏吉
	副 査	教授	近藤 博之
	副 査	教授	木村 涼子
	副 査	准教授	高田 一宏
論文審査の結果の要旨			
<p>1990年代後半以降、「ニート」や「フリーター」に象徴される若年者の雇用問題、格差社会論、「子ども・若者の貧困」といったテーマのもとで、ノンエリートの学校から仕事への移行、あるいは大人への移行を描く研究が蓄積されてきた。しかし、従来の研究は、エリートとノンエリートという区別に目を向けてはいたが、ノンエリートの内部における階層性やそれを編成する原理には光を当ててこなかった。本論文の目的は、ノンエリート内部における大人への移行過程の階層性を編成する原理を明らかにすることにある。そのために、＜ヤンチャな子ら＞と名づける男性たちを、高校一年生から20歳を過ぎるまで追跡して得られたデータを質的手法によって分析・検討した。</p> <p>本論文は6章から構成されている。1章では、「ヤンキー」と呼ばれる若者たちが先行研究でどのように描かれてきたかを確認した上で、＜ヤンチャな子ら＞の生活実践を社会空間・教育界・ヤンキー界という3つの力学から捉える視点を提示した。2章では、＜ヤンチャな子ら＞に対する調査の方法と対象について述べた。3章から6章が、本論文の本論となる部分である。</p> <p>まず3章において、彼らと学校・教師との関係について考察した。従来の研究の結果とはうらはらに、対象となった高校においては彼らが教師に抱く感情は、決して否定的なものではなく、むしろ肯定的なものとなっていた。続く4章では、＜ヤンチャな子ら＞という集団の内部構造を検討し、彼らが共有する象徴的秩序にしたがって、諸個人が階層化して位置づけられている現実を明らかにした。その階層状況のなかで下位に位置づけられている3人に焦点を当てたのが5章である。彼らの語りを分析することを通じて、彼らの集団内には、2つの分断された経路をたどる者たちが内包されている状況を明らかにすることができた。最後の6章では、彼らの職業経験をたどることにより、5章の対象となった者たちは不安定な職業生活に入っていかなざるをえない状況を描写した。</p> <p>本論文は、教育社会学に分野における生徒の下位文化研究の流れに属するものと位置づけうるが、その形成プロセスの今日的状況を生き生きと描写したこと、さらに反学校集団の中にも分断状況が存在するのであり、特にきびしい家庭環境に生まれ育った者は不安定な職業生活に陥らざるを得ないという負の連鎖を見出したことに特に大きな学問的意義を認めることができる。</p> <p>以上のことから、本論文は博士（人間科学）の授与にふさわしい内容を備えていると判断した。</p>			